SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

語順に及ぼす韻の影響について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 浅野, 幸生 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000416

語順に及ぼす韻の影響について

浅　野　幸　生

1.

古代語における語順の自由さが強調され過ぎていた時期があった。理由は二つある。一つは印欧語そのものの性質に関わることである。周知のごとくこの語族は、多彩な屈折語尾により文中における機能を明示することを一大特徴としている。従って、特にその古い層においては語順の制約が弱く、現代の英語やフランス語のように主辞と目的辞の位置関係すらも厳密に決まっているわけではなかった。厳密な配語法を誇るドイツ語さえも、4世紀までさかのぼれば語順の極めて自由な言語であった。(1)

フランス語の祖先であるラテン語は―ギリシャ語やサンスクリット語ほどではないにしても―かなり屈折語尾を保持していて、当然幾通りもの語順が許容されていた。それでもその中には頻度の高い「主要な」語順が存在し、ラテン語の場合はS－O－Vであることが指摘されている。(2) 現代フランス語はS－V－Oであるから、この間に本質的な変化が起こったことがわかる。今の日本語の語順が英語の語順になるのと同じことである。この変化が中世のある時期に急速に進んだのは、外部からの影響―つまり、有力な話し手がゲルマン人になったこと―を抜きにしては考えられない。語順が固定化したのは、ラテン語の6格体系が（古仏語の段階で）不完全な2格体系になり、さらにその区別も失われたためとこれまでしばしば言われてきたが、(3) これとて鶏と卵の関係でその因果関係を単純に言い切ることはできない。

もう一つの理由は資料に関わることである。現在では文書の主流を占める「散文」は、文学の歴史の中では「韻文」に先立たれ遅れて登場する。現存する最古のフランス語文献が9世紀半ばのもので、それ以降俗語文学が散発的に登場するが、初めて散文が現れるのはやっと13世紀になろうとする頃である。

韻文は音節数や脚韻など様々な制約があるので、大抵は日常の自然な言語状態を忠実に反映してはいない。語順の問題に限って言うならば、各行の最後で韻を踏まなくてはならないため、話し言葉の語順とは違った形にならざるを得ないことがままあるであろう。これは現代詩においてさえある程度言えることである。韻文しか残っていない時代に採用されていた語順をどうやって知ることができるだろうか。これまで行われてきた一番大きな間違いは、韻文作品上に現れた多様性を鵜呑みにすることである。より小さい間違いは、韻文であることを多少考慮に入れながらも、そこに現れた現象を現実の反映としてせいぜい統計的にしか処理しないことである。中世フランス語に付与された「過度の自由さ」は、ここに起因する。たとえ主格と目的格が形式上区別されていた場合でも、それらが話す度に自由に入れ替わるほど不安定な状態はとても実用的とは言えないであろう。そのような状態が庶民に受け入れられるとは考えにくいのである。

当時の話し言葉の語順を完全に再現することは所詮無理であるとしても、少しでもそこに近づくための方法について考えてみたい。

2.

13世紀初頭に現れた二つの散文作品は、同タイトル（La Conquête de Constantinople『コンスタンティノープルの征服』）で同じ事件（第4回十字軍）を描写したものであるが、筆者の社会的立場等の違いにより多少の文体的差異を見せる。韻や音節数の拘束から解放されのびのびと描写されているという共通点はあるが、幹部として従軍したVillehardouinの方はおそらくその高い教養からか、それ以前の文学作品（韻文）の影響がかなり見られる。本を書くということがまだ特殊であった時代にあって、彼は過去の―あるいは同時代の―名作を常に参照せざるを得なかったであろう。そもそも散文で書くということ自体、勇気のいることに違いなかった。(4)

他方一兵卒として参加したClariは、明確なヴィジョンをもって散文を採用したというよりは、韻文で作品を書くほどの教養がなかったためやむなく日常の話し言葉を用いたという印象がなきにしもあらずの面があって、その文体には計算や推敲の跡が殆ど見られない。(5)だからこそ彼の著作は、当時の言語状況を知る上で比類の無い価値を持つのである。語順に限って言うならば、前者は古くから―つまり『ロランの歌』に始まる武勲詩やその後に続く宮廷風物語な

どの一韻文にしばしば見られる原ゲルマン的配語法から離れることに強い抵抗感を感じながらも、自身が日常的に用いている語法にしばしば頼らざるを得ない様子が伺われる。[6] 彼自身、この著作の文学的歴史的価値を強く意識し後世へ残そうという気持ちを持ちながら執筆していたであろうから、叙述は様式と格調をもって行われるのがむしろ自然であった。伝統的語順の踏襲とその時代に読者と共有していた語感の間を常に揺れながら、彼の記述は様々な形を見せる。

韻文に比べて散文の方が、拘束が少ない分、話し手の日常的語法をより忠実に再現していることは疑い無い。残存する最古の文献『ストラスブールの誓約』(842) に見られる語順は、ゲルマン語の語順そのものである。[7] 13 世紀初頭の Clari の作品においては、もうフランス語の語順にかなり近づいている。この 3 世紀半の間に進行していた変化について、散文や録音等の資料の欠如によりわれわれには殆ど知ることができない。変化の方向は判っても、順序とクロノロジーが不明なのだ。韻文は進化しないので、その裏で進行する変化を映し出さない。従ってこれまでしばしば行われていたような、韻文に現れる語順を統計的に処理分類して、語順の自由度が高いとかかれこれの語順が主流だとか言うのは以上のような認識の欠如したかなり乱暴なやり方であると言える。

3.

ストラスブールの誓約から即、9 世紀半ばには純粋にゲルマン的配語法が行われていたと結論することは危険である。5 世紀末にフランク族がラテン語を自らの言語として採用して以来、彼らの元の言語の語順をこの言語に徐々に適用し、一時期これが規範と言えるまでに普及した期間があったとしてもそれがいつかを正確に言うことはできない。ただ誓約の政治的意味を考えるならば、そこに現れた語順を当時の俗語のそれと見なすことにさほど違和感は無かったであろうことは既に確認した。[8]

いずれにせよ、このように一度はゲルマン色に染まったはずの俗語が、その殻を徐々に脱ぎ捨て長い時間をかけてフランス語特有の構成法を獲得してゆくわけである。13 世紀初頭は散文というかなり直接的な証拠によりその到達段階を一歴史上初めて一確認できた時代であるが、その段階での「フランス語化 (francisation)」は語順に関してはせいぜい 60 ～ 70%位なものである。それも主節の方がかなり進行していて、従属節についてはまだまだ形成途上であった。[9]

9 世紀半ばから 13 世紀初頭にかけての「規範無き三世紀半」に、フランス文

学は第一の黄金期を迎え多数の韻文作品を排出した。確立された韻文の形式はその元となる口語の現状を覆い隠し続け、ある時突然種明かしのように散文が登場するまであたかも旧弊が持続していたかのように見せかけるのである。この期間にフランス語の語順に起こったことは以下の通りである。

A．主節において：ゲルマン語から受け継いだ V2（動詞を文の 2 番目に据える）傾向を押し進める。
B．従属節について：ゲルマン語特有の「枠構造」を徐々に放棄し、主節と同じ原理を採用してゆく。

近年の研究によれば、Aは極めて早い段階から始まり、遅くとも文学時代の初期にはもう一般化してきていたことが判っている。この時代の V2 は、主語以外も容易に動詞前に位置するという点で近代の V2 とは原理的に異なる。BはAを前提として進行するのだが、12 世紀末までの韻文作品には顕著には現れず、前述の 13 世紀初頭の散文で突如として前面に出てくる。もちろんこの類の変化が突然起こるわけもなく、実際にはそのずっと前から進行していたに違いない。ではいつ頃からどの位進行していたのであろうか。確実な根拠を持って言えないのは残念だが、12 世紀の間にこの「主節への収斂現象」がかなり進んでいたことは間違い無いであろう。

4.

当時の「自然な」語順が韻の影響によってどのように歪められたかを、具体例を通じて見てみたい。用いるテキストは、1280 年代に書かれたと考えられる宮廷風物語である。(Chrétien de Troyes: ***Perceval ou le conte du Graal***）1 行 8 音節で 2 行ずつ単純な脚韻を踏んでいる。プロローグを除いた物語の冒頭から引用する。

Ce fu el tans qu'arbre florissent	1
Foillent boschaige, pré verdissent,	2
Et cil oisel en lor latin	3
Dolcement chantent au matin,	4
Et tote riens de joie enflame,	5

Que li filz a la veve dame	6
De la gaste forest soutainne	7
Se leva, et ne li fu painne	8
Quë il sa sele ne meïst	9
Sor son chaceor et preïst	10
Trois javeloz, et tot ensi	11
Fors del manoir sa mere issi,	12
Et pensa que veoir iroit	13
Hercheors que sa mere avoit	14
Qui ses aveinnes li herchoient;	15
Bués doze et sis herches avoient.	16

Ce fu el tans 以下5行目までは、接続詞 que（現代語に訳せば où）に導かれる従属節である。先に述べたように、中世フランス語はおそらくはゲルマン語の影響で特殊な語順をとるようになった。

従属接続詞　［主語（S）　＋　目的補語（O）　＋　動詞（V）］

動詞の部分が2要素から成っている場合、助動詞に当たるもの（V_1）が後で（現代語であれば）それに続く不定詞・過去分詞（V_2）が前に置かれる。このV_2－V_1の形こそがゲルマン流枠構造の最大の特徴であり、ストラスブールの誓約に現れる従属節はこれに忠実な形を見せている。ここで que に導かれる5つの文は動詞が単純形で目的補語の欠如したものなので、Foillent boschaige のような S,V の転倒した形（これは韻とは関係無い）とか、3－4および5に見られるような副詞（句）が動詞の前に出てくるぐらいである。この時代の副詞は現代より遙かに位置が自由で、かなり長いものでも平気で動詞の前に置かれる。[10] 従って、行の終わりに置かれた場合のみ脚韻との関連が考え得る。

このようなことは形容詞についても言える。7で forest を修飾している2つの形容詞 gaste, soutainne は明らかに韻の都合で位置が決められている。

主語と動詞の位置関係では、2で転倒8で擲置（てきち）（rejet）が行われているが、主節では殆ど原則通りの位置に置かれている。副詞や形容詞の位置が自由なため、韻文にあってもこれらの位置をやたらと変える必要は無いようだ。これを変えるときは何らかの文体的効果をねらうか、さもなくば押韻の関係上やむを得な

い場合かもしれない。そうすると 13 で ... pensa que *veoir iroit* (il pensa qu'il irait voir) となっているのは、14 の avoit と韻を踏ませるために V_2-V_1の形にした可能性が高い。もしそのことを考慮に入れずに見たならば、古い従属節の枠構造がこの時代にまだ行われていたかのように映ってしまうであろう。

同じ作者の別の作品に同じ形が見られる。(***Erec et Enide***)

Qu'il voloit le blanc cerf chacier	①
Por la costume ressaucier	②
Mon seignor Gauvain ne plot mie,	③
Quand il ot la parole oïe.	④
・・・・・・・・・・・・	
・・・・・・・・・・・・	
Qui le blanc cerf ocirre puet,	⑤
Par reison beisier li estuet	⑥

⑤はそれだけ見ると典型的な従属節の枠構造である（$S-O-V_2-V_1$)。ところが同じテキストのすぐ近くに$S-V_1-O-V_2$が 2 つもある（①と④)。いずれも韻の影響を受けている可能性はあるわけだが、⑤も⑥の estuet との押韻の必要上こうなった可能性がある。

古仏語において、主語人称代名詞の省略、副詞や形容詞の位置の自由さは脚韻という窮屈な制度の潤滑油となっている。それだけで間に合わないときは主語・動詞の配置換えさえしなくてはならないが、それがたまに行われたからと言ってその時代の口語でその形が使われていたとは限らない。文筆家にとっては、その形が書き言葉の伝統の中で使われ続けてきたという事実があれば十分なのである。

5.

先行の研究において、前述のような従属節の枠構造は 13 世紀初頭にはほぼ崩壊してしまっていたことも判ったのだが、そのわずか十数年ほど前に書かれた韻文にはこの形がある。書き言葉から日常の用法を推測する時は慎重を要する。主語人称代名詞にしても、当時の話し言葉では相当義務化が進行していただろうとも推測できるのだが、韻文を書くに当たってこの要素の任意性は、音節数

をそろえる上でも便利なことであったろう。

先にも述べたとおり、当時の作家たちが韻文の伝統の上に執筆していたとすれば、その作品が背後の言語事情をよく映し出していることは期待できない。12 世紀の韻文の方が 11 世紀の韻文より形式的に新しい必要は無いのだから、時代を追って調査しても事態の推移が明らかになることも期待できない。ただその一方で、われわれはどんなに作為的な文章を書こうとしても—それこそ典型的なケースとして「擬古文」を書こうとしても、知らず知らずのうちに自身が日常接している言語の干渉を受けてしまうということも否定できない。これは特に語彙面で顕著であろうが、語順についても無関係では無かろう。

韻文しか存在しない時代の語順を推測する考え得る一番確実な方法は以下の通りであろう。

1．出発点のゲルマン的語順と 13 世紀の散文から推測される当時の支配的な語順を明らかにする。
2．その 2 点間に現れうる変異を網羅する。
3．調査期間を数十年ごとに区切り、それぞれの段階で変異の一つ一つについて頻度を調べる。その際、**一つ一つの生起について韻や音節数などの干渉が無いかを確認し、無い場合と可能性のある場合を同等に扱わない。**（一案として、数字上のハンディを与える）
4．こうしてできた統計結果から、それぞれの段階における語順の優先階層を明らかにする。

通時統辞論的観点から言えば、出発点から目標点にかけて働いた変化の諸動機と変異の間の時間的序列を明示することが理想と言えるだろう。

【注】

(1) ゲルマン語派の現存する最古の文献はルーン文字による断片的な碑文を除けば、紀元後4世紀にウルフィラ僧正によってギリシア語から翻訳されたゴート語の聖書である。そこでは語順のみほぼギリシア語のままになっているが、その語順自体は何ら文法的な意味を持つものではなかった。A. Meillet, p.187 参照。

(2) Dangel, p.113 以下参照。

(3) 古仏語においては男性名詞は格の区別があるが女性名詞は区別が無い。ラテン語の主格と呼格が古仏語の主格（cas sujet）となり、その他の格—対格、属格、与格、奪格—が斜格（cas régime）に吸収された。

(4) Villehardouin: ***La Conquête de Constantinople***, Société d'édition, Paris, 1973. の序文で校訂者 E. Faral によれば、作者はこの作品を日記風に書いていたのではなく（Villehardouin n'a pas écrit au jour le jour.・・・, il composait à quelque distance des événements.）、実証的で（Le ton et le style de certains discours tenus par des messagers, ... semblent indiquer qu'il disposait d'une copie des lettres ...）、ある面では正確であるが（Ce qui frappe principalement, c'est la précision et l'exactitude de ces indications chronologiques.）、叙述の公平さには疑問があると言う（Témoin bien informé, il aurait manqué d'impartialité : son dessein, en écrivant, aurait été celui de'un apologiste qui aurait voulu donner des événements une version favorable à ses intérêts et à ceux de son parti.）。

(5) R. de Clari : ***La Conquête de Constantinople***, Christian Bourgois éditeur, Paris, 1991. の校訂者 A. Micha もその序文で指摘しているとおり、時の接続詞 Quand を連用するなど、Villehardouin と比べてもより無作為な文章に思える。

(6) Villehardouin に現れる従属節 839 例中、枠構造の最も顕著な特徴である V_2－ V_1 形を示すものは 12 例確認された。浅野（2000）参照。

(7) 浅野（1997）参照。

(8) Ibid. また Cerquiglini も参照のこと。

(9) 浅野（2000）参照。主節が V_2（動詞を文の2番目に置く）の傾向を確立したのは、一般に言われているより早かったと思われる。なぜなら、この原理は元来ゲルマン的なものであり彼らが新しく受け入れる必要の無いものだったからである。結局語順における脱ゲルマン化とは、本来ゲルマン的であった主節の配語法に、従属節が—それまでの独自の原理を捨てて—自らを適応させていった過程に他ならない。実際 13 世紀（の書き言葉）にあっては、主節の安定した状態に比べ従属節はまだかなりの混乱を見せていた。

(10) Ibid. これは決して韻文の特徴ではなく 13 世紀の散文にも普通に見られるので、当時の慣用と言って差し支えないであろう。平叙文におけるＳ－Ｖ形の定着とその間に入る要素が制限されてゆく過程は並行して進んだようだ。特に目的補語に関しては、その後厳密な規則が作られてゆくことになる。現代フランス語においては、Ｖが２番目に来るかどうかよりも名詞目的補語が動詞の直後に来るかどうかの方が文の容認可能性の決め手になる。

〔参考文献〕

Buridant, C. : "Les résidus de l'ordre OV en ancien français et leur effacement en moyen français", *Romania* 108, pp.20-65. 1987.

Cerquiglini, B. : *La Naissance du français*, coll. Que sais-je?, n. 2576, Presses Universitaires de France, Paris, 1991.

Dangel, J. : *Histoire de la langue latine,* coll. Que sais-je?, Presses Universitaires de France, Paris, 1995.

Foulet, L. : *Petite syntaxe de l'ancien français*, Champion, Paris, 1930.

Guiraud, P. : *L'ancien français*, coll. Que sais-je?, n. 1056, Presses Universitaires de France, Paris, 1963.

Holmes, U. / Vaughan, E. : "Germanic influence on Old French Syntax", *Language IX*, pp.162-170, 1933.

Marchello-Nizia, Ch. : *L'évolution du français : ordres des mots, démonstratifs, accent tonique*, Armand colin, Paris, 1995.

Meillet, A. : *Caractères généraux des Langues Germaniques*, Librairie Hachette, Paris, 1949.

Raynaud de Lage, G. : *Manuel pratique d'ancien français*, Picard, Paris, 1978.

Wartburg, W. von : *Evolution et structure de la langue française*, Francke, Berne, 1934.

浅野幸生：「古仏語における従属節の語順に関する一調査」、ロマンス語研究　30、pp.17-24, 1997.

— 「13 世紀仏語散文における従属節中の語順」、ロマンス語研究　33、2000.